



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2014. 9.1 発行 NO.32

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

第39回保育総合研修会（今年1月開催）で、本機構は「保育のグランドデザイン」を描くために…今大切にしたい保育（教育）とは何か」をテーマに、シンポジウムを担当しました。その論議をさらに深めようと、前号（No.31）では「根源的探究心」をテーマに、

鈴木眞廣委員長と久保健太委員に論点を執筆いただきました。

引き続き今号では、福田泰雅委員と森真理委員に、視点を変えて保育のグランドデザインへのアプローチを執筆いただきました。

論点1

「一人ひとりを大切にすること」と「平等」の狭間 …グランドデザインのための言葉

グランドデザインとは、今までとは異なる社会を描くための設計図のようなものです。

そこでの教育観は、すでにある正解を子どもの中に内面化するのではなく、子どもの中にあるものを引き出すことにあります。つまり、無色透明の子どもに大人が色を付けてあげるということではなく、もともと子どもがもっている色を充実させたり、他の色を子ども自身が取り込んで自分の色として混ぜ合わせたりするものです。そのために、言葉の使い方や言葉の内容も従来とは意味が異なる場合もあります。

保育では、「一人ひとりの子どものために」という言葉をよく耳にします。しかし、「子ども一人ひとり」という言葉は、どのように実践され、実現されているのでしょうか？

実際の保育の中では、「一人ひとり」という言葉とともに、「みんな一緒に」という言葉が同居しています。「一人ひとり」と「みんな一緒に」という言葉はどのように関係しているのか、考えてみる必要があります。

保育の中で「みんな一緒に」を考える時、誰にも同じように対応するという「平等」という概念が背景にあるように思います。この「平等」という言葉は、ほとんどの場合、「均等」と同じ意味で考えられているのではないのでしょうか。

例えば、ケーキを6人で平等に分けるとする場合、均等に6等分することを平等と考えますが、まったく異なる平等の考え方もあります。それは、「私はイチ

ゴが好きだから、イチゴがついているところをたくさんほしい」とか、「今日は体調がよくないから、少しでいい」とか、「私は甘いものは苦手だから、いらない」など、視点を個人に合わせて、それぞれの希望に合わせて切り分け、それぞれの人が納得できる方法をとることも平等なのです。

では、表面的な平等ではなく、それぞれの納得の上に成立する平等とは、保育においてどのようなことでしょうか？

例えば、保育では食育計画によって野菜を栽培することがあります。その場合、なぜかクラス全員が同じ野菜、例えば、さつまいぶを育てています。全員が同じものを育てる場合、同じものを育てる目的は何であり、全員でなければならない理由は何でしょう。それらが明確であるならば、そのように保育すればよいと思います。

しかし、平等について考え方を変えてみると、他の方法も可能となります。

まず、子どもたちとの対話から始め、これからの旬な野菜について語り合った後、子どもたちがそれぞれ自分の育てたい野菜を選択します。多くの場合、種類の野菜を3、4人が選んでいます。種類を多くできない場合もあると思いますが、その場合には、子どもたちが相談して折り合いをつけなければならない場面もあるかもしれません。そして種や苗の金額を調べたり、注文したり、買いに出かけたりするのも同じ野菜を選んだ子どものグループで行います。小グループで



活動する際に、その他の子どもたちは、同僚の先生たちに見ていただく必要があると思いますが、これらはお互い様で助け合えばよいでしょう。

そのようにして栽培を始め、どのような点に注意をして栽培するのかなどについても話し合いをもったり、図書館に出かけて調べたりすることもできます。そして、それぞれの育てている野菜がどのように成長しているのかについて記録を取ってみます。観察記録として写真を貼ったり、文章で表現したりしますが、継続して書き込んだり、見たりできるように、ロール紙などを利用するとよいでしょう。

そのロール紙にクラスで栽培しているすべての野菜を書き込めるようにして、何月何日にどのように育てているのか、どんな作業をしたのか、収穫した野菜はどうだったのかなどを、誰にでも一目でわかるようにします。

そして、みんなに見えるように保育室の前の廊下や、時には玄関などに掲示すると、自分が育てている野菜だけでなく、他のグループが育てている野菜の成長の様子も知ることができ、他のクラスの子どもたちや、先生たち、保護者の方々、園を訪れる皆さんなどにも

共有される情報となります。また、そのように情報を共有することによって、それらの人々から新たな価値がもたらされ、学びの可能性が広がります。

教育学者の大田堯は、「問題と答えの間を短くしない」と述べました。それは、問題に対して少しでも早く、求められた答えを出すことではなく、問題に向き合ってさまざまに思考して、自分の答えに辿り着く過程が学びの本質であることを表しているのです。

見た目や結果を同じにする平等から離れ、一人ひとりの興味や関心を大切にすることによって、一人ひとりが深く学ぶと同時に、異なる意見を伝え合い、互いに学び合うことが可能となります。このようにして、本質に近づこうとするプロセスの充実が図られるのではないのでしょうか。

また、平等の概念を均等や均質から離れると、多数の子どもの距離の取り方にも影響してくるでしょう。つまり、全員に同じことをしなくてはという呪縛から解放され、今、この子は何を必要としているのかというところで保育者として向き合えるわけです。

人は、それぞれ自分がやってみたいことをやりながら、その中で経験的に学びます。その考えたことを表現すると、当然、他の人たちと意見が異なる場面に遭遇します。グランドデザインが描く社会の中では、その意見の異なりを抑え込んでしまうのではなく、それぞれが意見表明しながら調整する生き方、つまり、多様性を活かし合う社会の実現が求められるのではないのでしょうか？

今一度、保育の中でみんなが同じにすることについて、平等に保育しているとして思考をストップさせないで、「なぜ同じなのだろう？」と疑問をもち、保育者みんなで話し合ってみてはいかがでしょうか。

（福田泰雅●鳥取・赤碓保育園園長）

論点2 大きなことは小さな私／私たちの歩みから

大流行りの「グランドデザイン」ですが…

「国土のグランドデザイン2050 対流促進型国土の形成」（国土交通省）、「グランドデザイン・大阪」「かながわグランドデザイン」等々、「グランドデザイン」は、国や地方自治体、保育園や幼稚園をはじめとする保育施設・学校教育機関のホームページ等にも見られ、

大流行りの言葉のようです。

辞書によると、「全体構想・総合計画」「全体を長期的、総合的に見渡した構想」「大規模な事業などの、全体にわたる壮大な計画・構想」（『大辞林』三省堂・<http://www.weblio.jp/content/grand+design> / 2014年7月31日閲覧）とあります。「保育のグランド

デザイン」となると、将来を見据えて保育の理念を明確化して、実践のあり方を描くということになりましょう。

しかしながら、いざ、「グランドデザインとは何？」と聞かれると、わかったような…、しかし、ピンとこないという声が聞こえてくるのが現状ではないでしょうか。なぜ、ピンとこないのでしょうか。私ごととは縁遠いもの…のように思えるからでしょうか。

「グランドデザインが描く社会の中では、その意見の異なりを抑え込んでしまうのではなく、それぞれが意見表明しながら調整する生き方、つまり、多様性を活かし合う社会の実現が求められているのではないのでしょうか？」

と、福田泰雅先生は前述しておられます。

保育のグランドデザインを描くということは、上から降りてくるものというより、一人ひとりの根っこ（思いや願い）をしっかりと育み、将来へと翼を広げていく（持続・継続性と発展性につながる）実践の保障をすることでしょう。それは、よくいわれるトップダウン（上から下へ）から、ボトムアップ（下から上）への初めの一步への誘いです。

根っこからの「グランドデザイン」を描く…

日本の保育のグランドデザインというと、おそらく多くの方が『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』を思い描くことでしょう。加えて『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が今年4月に告示され、日本の保育は三つ巴のグランドデザインの中で展開するという状況となっています。この三つは日本の保育の大黒柱でありますから、尊重し、丁寧に読み込むことは大切です。そこに加えて、保育のグランドデザインが「第二の教育観」（私見では、「第二」とすることに少々心地悪さを覚えています）に基づく世界を描く方向性として捉えるのであれば、子どもも大人も保育の世界と出会い、その世界から意味を引き出し、自園での意味づけや実践をしていくことになりましょう。

さて、ここまで書いてきて、「そのようなことの実現は理想でしょ！無理ムリ！」という声が聞こえてきそうな気配を感じます。しかし、一人ひとりの声が反映される保育のグランドデザインを描くことは無理なことなのでしょうか。「そんなことはありませんよ」ということを、ニュージーランド、米国、そしてイタ

リアのレッジョ・エミリア市の展開に見出すことができます。

ニュージーランドの保育・教育カリキュラムである「テ・ファリキ（Te Whariki）」は、まさに「根っこから」の思いで制定されたのです。執筆中心者のマーガレット・カーさんやドーリーン・ロンダーさんをはじめ執筆者チームが全国の施設サービスを巡り、ヒアリングを重ね、マオリ語のテ・ファリキが意味する「編み込んだマット」のごとく1996年の制定へと至ったのです。「テ・ファリキ」は「子どもができるようになること（目的）」を表したカリキュラムではなく、有能で力づよい人としての幼児にとって大切なこと（哲学・展望）を4つの原理（全人格・全体的発達／エンパワーメント／家族とコミュニティ／関係性）と5つの構成要素（心身の健康／所属感／貢献／コミュニケーション／探究）として表しています。

筆者がニュージーランドを訪れた際、保育者も保護者も「テ・ファリキ」に通じており、自分の言葉で語られるのを見聞きして驚いたのですが、このような道のりがあったから、と納得したのです。

米国には、国が制定したカリキュラムはありません。NAEYC（全米乳幼児教育協会）が策定したDAP（Developmentally Appropriate Practice / 「発達にふさわしい実践」）を保育の拠り所、グランドデザインとしている園が殆どです。1987年に初版が発表された際、「研究者が『発達』を普遍的、個人的、直線的な視座で捉え、『ふさわしい・ふさわしくない』と断定している」と実践者や研究者から異見が述べられました。10年後の第2版には「発達と文化」の関係性が述べられ、「定期的に見直して、意見を表明してください」とNAEYCから会員にメッセージが発信



ニュージーランドの保育施設のポートフォリオ

されました。

現在は、第4版に向けて、米国在住でなくても意見のリクエストが発信されています。

保育のグランドデザインを徹底的に市民の声から、というのがイタリアのレッジョ・エミリア市です。

「レッジョ・エミリア市の幼児学校と乳児保育所指針・規定 (Regolamento Scuole e Nidi D'infanzia del Comune di Reggio Emilia)」(和訳ブックレットは今年10月に出版予定)は、最初の一文に「子どもの教育は権利であり、コミュニティの責任」と、はっきりと表明しており、策定のプロセスには行政、実践者はもとより、各園の保護者代表や地域住民の委員が集まって行われました。

出版担当のフランセスカさんとアンナマリアさんも、「発刊までは決して容易な道のりではなかったが、たくさん話し合うことで、子どもへのまなざしが丁寧になり、子どもに聴くという態度が養われ、子どもの視座による規定になった」と話してくださいました。

大きなことは小さな私／私たちの歩みから

—グランドデザインは「MVP」から

それでは、「保育のグランドデザイン」をどうやって具現化するのでしょうか。

国、地方、地域、園レベルと、それぞれのグランドデザインがあることでしょう。先に挙げた三つの例は、即席ではなく多くの人がかかわり、かなりの時間がかかっています。その中で、三つの例に共通するのは、一人ひとりの「声」が尊重されたということではないでしょうか。

保育に携わる者一人ひとりが保育のグランドデザインへの「声」をもつ当事者であると自覚して、保育に対する「使命 (Mission)」を問い、「展望・未来像 (Vision)」を、「熱意 (Passion)」をもって描きたいものです。まさしく、私／私たちの保育の MVP を語り合う関係性を育みたいものです。

『保育通信』に連載中の「シリーズ*乳幼児の教育を考える 保育のグランドデザインを考える対談」は、保育の枠組みとは？人間観・子ども観・社会観とは？と、“読者の方たちとの編み直し”へのお誘いです。誌上で終わらせないで、対話し、活用したいものです。

(森 眞理●立教女学院短期大学准教授)

編集後記

◎「グランドデザイン」は個々の生きざまの中に

新制度論議が佳境を過ぎて、決断と準備の段階に入りました。一方、教育・保育要領については、ハイブリットな仕上がりになった感があります。が、まだ目にしていない、あまり関心がないと苦笑する仲間に出会います。そんな現状では「制度の中身」とともに「要領の内容が大事」と訴える声は、湧き上がらない。国家としても、本文の《3つの例＝国》に比べると、思い入れも切実感も乏しい。なぜでしょう。

「子どもは大人に叱咤激励されて成長する存在」「目上の人や親のいうことを素直に聞くのが美德」「有能性を認める以上に庇護すべき対象」という子ども観が、国民感情として、まだまだ多数派を占めているからだと思えてなりません。換言すると、「同質化」「均質化」「上意下達」が安心して暮らすための生活指針になっている。これは「子どもの権利条約」の精神に反する！反しない？

「教育・保育要領」について語る際、このような掘り下げた論議を交えてはいかがでしょう。

海外事情に詳しい森委員は、3つの国の例を引いて、「保育のグランドデザイン」は、一人ひとりが保育のグランドデザインへの「声」をもつ当事者であると自覚して、保育に対する「使命 (Mission)」を問い、「展望・未来像 (Vision)」を「熱意 (Passion)」をもたずしては描けない、つまり、「MVP」を語り合う(対話の)関係性が現場の中に根づくことが基本であり、コアになると言っています。これは、最近、「同僚性」という視点でも論じられており、保育界全体に小さな、けれども確実に風が吹いている実感があります。

福田委員の「実践報告」ともいえる“語り”は、「平等」「均質」「多様性」について、「栽培活動」を事例に展開されたので、じつにわかりやすく、納得できる、深みのあるものとして理解できました。「子どもらしい暮らし方」とその背景にある“これからの社会のありよう”を意識した実践の必要性、それは森委員が論及された「MVP」にもつながるものでした。早速、明日から取り入れようと試みるなら、何よりもまず、保育者集団の「均質思考」や「してあげる感覚」の有無や度合いを、さまざまな保育場面からつぶさに検証する作業から始めるべきだと思います。

研究機構の委員会において、グランドデザインを語り合って2年以上になります。行き着くところは、日本の保育をデザインし直すのは誰か、グランドデザインを描く主体は誰か、という根源的な問いにぶつかります。

これらの問いに答えるのがあなたでないなら、一体、誰なのでしょう。

(片山喜章●神戸市・はっと保育園園長)

◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp